

広島女学院大学総合研究所年報

〔電子版〕

Vol. 16



広島女学院大学総合研究所

2012

目 次

I.	はじめに.....	所長 坂井堅太郎	(1)
II.	2011 年度公開セミナー報告.....	英米言語文化学科	(3)
III.	2011 年度広島女学院大学学術研究助成【研究概要報告】.....		
	〔個人研究〕		
	・ D.H.ロレンスから見たブロンテ姉妹 ―エミリを中心に―.....	山内 理恵	(5)
	・ 日系グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント.....	篠原 収	(7)
	・ スクランプリング・フォーカス・トピックに関する 通言語的統語的研究.....	中村浩一郎	(8)
	・ 広島県備北地区における高大連携遠隔講義 ―遠隔講義受講者の意識調査および生涯学習への応用について―	中田美喜子	(10)
	・ 幼児と保護者における身体活動量の関連性 ―幼児の身体活動向上のための支援へ向けて―	田中 沙織	(12)
	・ アンチモダンとしてのサド.....	宮本 陽子	(14)
	・ Bochner 可積分関数の多次元上の開領域での本質的有界変動の特徴 付けに関する研究.....	橋本 一夫	(15)
	・ 幼児期に行う「ヌード(裸体像)デッサン」が引き出す効果について	三樹 正典	(16)
	・ 教師のコミュニケーション能力開発.....	石井 三恵	(17)
	・ 広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受 容過程の比較研究.....	末永 航	(18)
	・ 建築家の思索にみる現象としての空間へのアプローチと生活世界の つきつめ方.....	小野 育雄	(19)
	〔共同研究〕		
	・ 明治時代の日本について書いた在住西洋女性たち.....	Ronald D. Klein	(20)
	・ 食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー予防の新規 栄養管理の構築.....	妻木 陽子	(21)
	・ 大学組織運営における FD・SD の実践的課題に関する学際的研究・	松浦 正博	(22)
	〔学術図書出版〕		
	・ 内的場面と接触場面における三者自由会話への参加の調整.....	大場美和子	(23)
	・ ことばが語るもの ―文学と言語学の試み―.....	米倉 綽	(24)
IV.	2011 年度広島女学院大学学術研究特別助成報告.....		(26)
V.	2010 年度広島女学院大学学術研究助成【研究成果報告一覧】.....		(27)
VI.	専任研究員の活動報告.....	武政 孝治	(33)
VII.	特別専任研究員の活動報告.....	郭 順伊	(34)
VIII.	2011 年度広島女学院大学学術研究助成【交付一覧】.....		(37)
IX.	2011 年度科学研究費補助金【交付一覧】.....		(38)
X.	関係規程.....		(39)

I. はじめに

所長 坂井堅太郎

本研究所は、広く人文・社会、自然の諸領域にわたる専門の学術理論および応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献するとともに、地域社会に寄与することを目的としています。

2011 年度の広島女学院大学学術研究助成の交付件数は、「個人研究」11 件、「共同研究」3 件、「学術図書出版」2 件、「学会特別助成」1 件、そして「学術研究特別助成」3 件でした。「若手研究」、「萌芽研究」、「基盤研究」の新規の公募については、規程改正により 0 件でした。

2011 年度科学研究費補助金の採択は 6 件で、ほかに分担金の配分が 2 件ありました。また、厚生省研究費の分担金の配分も 1 件ありました。

『広島女学院大学論集』第 61 号は 12 月に刊行され、人文・社会分野 10 件と自然科学分野 5 件が、電子媒体として広島県大学共同リポジトリ（HARP : Hiroshima Associated Repository Portal）を通じて公開されています。

恒例の本学公開セミナーは、大学の学術研究成果の公開により、地域の皆様の知的好奇心におこたえし、地域社会に貢献することを目的に、毎年秋にシリーズとして行っています。2011 年度は第 29 回となり、「言語と文化の多様性; Diversity in Language and Culture」を総合テーマとして、文学部英米言語文化学科で多様な領域を担当する 4 名の教員を講師に迎えて、10 月 8 日、15 日、22 日、29 日の各土曜日に 14 時から 16 時まで、本学人文館 303 教室で開催されました。本セミナーは、一般市民の方々と本学学生を対象とするもので、1 回あたりの平均参加者数は約 75 名で、延べ 300 名の方々が来場されました。いずれの回においても、担当教員が現在取り組む多様な領域における研究成果が、分かりやすく解説され、また、熱心な受講生との活発な質疑応答がかわされました。公開セミナーの成果は、広島女学院大学公開セミナー論集としてまとめられ、HARP を通して発信されています。なお、本セミナーは 2012 年度の開催をもって 30 周年を迎えます。

学外との連携講座として、今年も牛田早稲田公民館と早稲田女性会との共催による「早稲田アカデミー」からの要請を受け、本学から講師を派遣しました。テーマはさまざまな分野にわたり、5 月から 11 月にわたって計 6 回開催され、参加者総数は 128 名でした。今年で 8 年目となり、参加数も増え、地元、牛田地区との連携が深まりつつあります。

財団法人「広島市ひと・まちネットワーク」によるシティカレッジでは、文学部日本語日本文学科の 5 名の教員が「日本古典文学に見る愛の形」というテーマで 6 月に講座（計 5 回）を広島市まちづくり市民交流プラザで開きました。参加者総数は延べ 161 名でした。

また、広島市草津公民館主催の連携講座「草津アカデミー」（2011 年 10 月 8 日 10 時か

ら 12 時 草津公民館）において、文学部日本語日本文学科の教員 4 名が担当し、延べ 140 名の参加者がありました。

本研究所に所属する特別専任研究員 1 名は、学習支援の仕事を担当しました。特別専任研究員の活動の詳細については、本年報「特別専任研究員の活動報告」をご覧ください。

本研究所は、上記のように研究活動とともに地域との連携を進展させつつあります。総合研究所が担う、学術研究支援という役割が増し、また科学研究費等の公的資金を取り扱う上での重要性が高まってきているにも拘わらず、これまで専任職員が不在でした。このような背景から、本年度から専任職員 1 名が本研究所に配置され、従来の嘱託職員 1 名に加え、2 名の体制となりました。

総合研究所のあり方についての皆様方のご意見やご提言をお寄せいただきますよう、お願いいたします。

Ⅱ．2011年度公開セミナー報告

文学部英米言語文化学科 主任 中村 浩一郎

2011年で29回目となりました広島女学院大学公開セミナーは、本学英米言語文化学科の4名の教員が講師を務めました。「言語と文化の多様性」(Diversity of Language and Culture)という共通テーマのもと、各講師が(1)「『性』の多様性」、(2)「言語の多様性」、(3)「イギリスの多様な表情」、(4)「アメリカ社会における人種意識の変遷」という内容で講演しました。性に関する言説についての社会的、歴史的視点、「手段」の規定のし方の日本語と英語の相違点、様々な文化からの影響を受けて変わっていくイギリス、アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識、という多角的な内容の講演で、言語と文化の多様性を考察することができ、その奥深さを再認識できたのではないかと、思います。

セミナーには、毎回70～80名の受講者の方にお越し頂きました。日本人講師3名の講演に関しては、「広い視野を持って他者を受け入れることの大切さを認識した」、「前置詞や冠詞などを詳しく学べる機会は貴重だった」、「アメリカの歴史について新しい視点から学べる機会を持てて興味深かった」などの感想を頂きました。更に、イギリス人講師1名の講演に関しては、英国の現状が理解できた」、「テキストが英語と日本語の両方で書かれているのは助かった」などの感想を頂きました。講演全体を通して、テキスト、ビデオ、スライドなどの使い方も概ね講評を頂きました。言語・文化の多様性に関して大きな関心をお寄せ頂き、興味を持って講演をお聞き頂き、更に講演後活発な質疑応答もできましたことは、主催者側にとりましても大きな喜びです。今回のセミナーが受講者の方々の言語・文化への更なる興味、関心につながることを願っております。

〔テーマの概要〕

今回の公開セミナーでは、イギリス文学、アメリカ文学、言語学、比較言語・文化という多角的な視点から、「言語と文化の多様性」を探究します。講義内容は、日英の文化・社会における、「同性愛」を中心にしたセクシュアリティ、文学に表現されている黒人の音楽と人種の関係、日本語と英語における機能語の役割の違い、時代とともに変容するイギリスのイメージです。多岐にわたるテーマについて、視聴覚資料を用いるなどして趣向を凝らして解説する予定です。受験英語では味わえない言語と文化が織り成す奥深い世界を、受講していただく皆様とご一緒に考えたいと思います。

〔講義の概要〕

第1回 10月8日(土)

セクシュアリティの多様性—同性愛から見る性の歴史

英米言語文化学科准教授 金田 仁秀

今日では、日本においても「同性愛者」が「同性愛者」として、さまざまなメディアに登場することが可能になってきました。しかしながら、「同性愛者」は、依然として「異性愛者」とは異なった「他者」であり、異質な存在とされています。そこで、本講義では、ヨーロッパや日本におけ

る同性愛の「誕生」や表象について考察しながら、社会的、歴史的な視点で性に関する言説を捉え直し、セクシュアリティの構築性について考えたいと思います。

第2回 10月15日(土)

アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

英米言語文化学科教授 森 あおい

アメリカの奴隷制時代には、奴隷は白人の支配者から文字を習得することを禁じられていました。したがって、文字として記録されることがなかった人々の「声」は、しばしば音楽を通して継承され、黒人霊歌、ブルース、ジャズ、リズム・アンド・ブルース、最近ではラップなど多様なジャンルを生み出してきました。本講義では、これらの音楽が響きわたる文学を読み解きながら、アメリカ社会における人種意識の変遷について考えていくことにします。

※本講演は、(独)日本学術振興会配分の科学研究費補助金(平成21年度-平成23年度 基盤研究(C) 研究課題名「アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサブカルチャー」)による研究成果にもとづくものです。

第3回 10月22日(土)

手段の表しかたの日英比較——乗り物の場合に焦点をあてて——

英米言語文化学科准教授 田中 秀毅

日本語では乗り物を手段として表すのに「バスで通勤する」のように助詞の「で」を用います。英語では手段を前置詞 by で表すと中学校で学習しますから「バスで」を by bus と訳すのはたやすいことでしょう。では、「マイカーで」を by my car としてよいのでしょうか。実は、日本語と英語では手段の規定のしかたが異なるため、手段の「で」と by は完全に等価ではないのです。本講義はそのメカニズムを解明することを目標にします。

第4回 10月29日(土)

The Changing Face of Britain - Images and Reality

英米言語文化学科准教授 John Herbert

There are many famous images of Britain, from Royal weddings to 霧のロンドン. However, are these images truly representative of modern Britain? Other cultures (including Japan) are changing the face of Britain in many ways. Using photos and video clips, this talk shows how Britain is changing, and examines some of the challenges facing the country in a modern multicultural world.

Ⅲ. 2011 年度広島女学院大学学術研究助成

【研究概要報告書】

〔個人研究〕

D.H.ロレンスから見たブロンテ姉妹—エミリを中心に—

文学部 英米言語文化学科 准教授 山内 理恵

1. 研究目的と意義

D.H.ロレンスがエミリ・ブロンテと『嵐が丘』について関心を持ち、そのことが彼の創作活動に影響を及ぼしたことを証明するために、申請者が 2004 年から取り組み続けている一連の研究である。今まで英文学批評の中では重視されてこなかった二人の関係に焦点をあてることで、ロレンス文学の新しい読みの可能性を示す。

2. 研究方法

ロレンスが作品、エッセイ、手紙、伝記などで残したエミリ・ブロンテと『嵐が丘』についての言及を拾い上げ、それぞれがどのようなニュアンスで言及されているかを探る。また、エミリ・ブロンテとシャーロット・ブロンテは批評の中でひとまとめに扱われがちだが、ロレンスが手紙の中でシャーロットについてどのように述べているかを分析することで、シャーロットとエミリに対する彼の感情を差別化する。

3. 2011 年度の研究概要報告

2011 年度は、10 月 15 日に熊本大学で開催された日本ブロンテ協会全国大会で「D.H.ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ」を研究発表した。この発表は出版用に書き直し、後日「D.H.ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ（書簡編）」として出版した。また、その他にも「『嵐が丘』をロレンス風に読む」を執筆、出版した。

まず、日本ブロンテ協会大会での研究発表を基盤として執筆した「D.H.ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ（書簡編）」では、ロレンスが残した全書簡の中で、シャーロットや彼女の作品について言及しているものを分析することで、シャーロットと彼女の作品に対する彼の感情の変化を示した。彼がシャーロットに言及している書簡はすべて 1910 年までに書かれており、6 通ある。最初の 4 通には肯定的な感情が記されているが、最後の 1 通では明らかに否定的な感情に変化している。この変化の理由を、ロレンスの伝記と照らし合わせながら考察した。そして、彼が実生活において、母親や恋人、女友達たちとのかかわり合いの中で、女性に対する不信感を膨らませており、それがシャーロットへの感情の変化に繋がっている可能性を示した。

次に、「『嵐が丘』をロレンス風に読む」では、ロレンスとエミリ・ブロンテの男女関係の捉え方の共通点を指摘した。両者とも情熱的なラブストーリーを描くことで有名だが、

批評では二人が描く愛を異質と論じる。エミリが描く愛は肉体や時間を超越すると解釈される一方で、ロレンスが描くのは生身の男女の愛と理解されがちである。しかし、両者とも理想の愛を巡る男女間の戦いを描いており、エミリの『嵐が丘』も、視点を変えれば生身の男女の戦いとして読むことができる。本論ではロレンスが『嵐が丘』をそのように自分の関心に引き寄せて読んだ可能性を示した。

以上、2011年度の研究によって、ロレンスが若い頃からシャーロット・ブロンテに否定的な感情を抱いていたことと、エミリ・ブロンテに対して独自の解釈を持っていた可能性を証明した。

〔個人研究〕

日系グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント

生活科学部 生活デザイン・情報学科 教授 篠原 収

1. 研究の目的

ビジネス環境がグローバル化するとともに、「雇用のグローバル化」への対応が今後の日本企業、とりわけ海外へ生産拠点をシフトしている中堅メーカーにとって重要な課題となると推測される。人材評価においても、国籍、民族、性別、年齢といった社会的要因によって類型化することの意味は薄らいできている。地球規模での「適材適所」の人材活用とともに、従業員同士がダイバーシティ(多様性)を容認、尊重しあえる企業文化を醸成することがグローバル化する日本企業にとっての優先課題といえよう。

一方で、日系グローバル企業はすでに5年前頃からダイバーシティ・マネジメントに積極的に取り組み始めており、多様な人的資源が持つ個々の能力を最大限に引き出すための経営戦略として、様々なダイバーシティ・デベロップメント・プログラムやダイバーシティ・トレーニングに取り組んでいる。そうした実践と成果は、「雇用のグローバル化」への対応が迫られている中堅メーカーにとって、当面する課題への解決策を提示することとなると考えられる。

2. 研究の経過

本年度は、昨年収集した図書を含めた関連資料を読み込むとともに、研究成果にまとめることに着手した。日本ビジネス実務学会での研究発表では、この数年間でダイバーシティ・マネジメントを背景として急速な進展を見せている日系グローバル企業における「グローバル採用」について、背景分析と実態を報告するとともに、大学教育における「グローバル採用」への対応の必要性和広島女学院大学における取り組みを報告した。啓明大学校では、「グローバル採用」と表裏一体をなす「非正規雇用」の増加に着目して、日韓の女性雇用労働の現状比較について論じた。

3. 研究成果

- ・ 篠原 収 「Current Conditions of Women's Employment and Labor」、 「Transitions in Policies Geared to Women」 JICA アフリカ女性リーダー研修 ひろしま国際センター(東広島市) 2011年8月12日
- ・ 篠原 収 「グローバル採用に関する一考察」 日本ビジネス実務学会中国・四国ブロック研究会(広島女学院大学) 2011年8月28日
- ・ 篠原 収 「日本女性雇用労働の現状と課題」 韓国・啓明大学校(招聘) 2012年3月20日

〔個人研究〕

スクランブリング・フォーカス・トピックに関する通言語的統語的研究

文学部 英米言語文化学科 教授 中村 浩一郎

1. 研究の目的

日本語のスクランブリング操作を、フォーカスに駆動される義務的な操作であるにとらえ、それが世界の諸言語のフォーカス移動とどのような関連があるか、を精査することを目的とする。更に、助詞「は」の示す意味機能を精査し、意味機能に従って3分類することも目的とする。更に、その分析を英語などの言語にも応用する方法も探る。

2. 研究の概要

本年度は、日本語の助詞「は」でマークされる句の意味・機能を3つに分類し、その統語上の位置を Rizzi (1997) など提唱される cartographic approach をもとに分析することを主眼に置いた。更に、本研究の主張を英語のトピック・フォーカス構造にも適用できることを示した。

まず、助詞「は」の意味機能について述べたい。Kuno (1973) 以来、「は」は主題と対照の2種類を示すと考えられている。しかし、Yanagida (1995) に従い、強勢を受ける「は」を、フォーカスとしてとらえる。更に、スクランブリングされた句と、強勢を受ける「は」で示される句が共起することが難しいことをふまえると、助詞「は」が示す句には、主題(Thematic Topic, TT)、対照主題(Contrastive Topic, CT)に加えて、強勢を伴う対照焦点(Contrastive Focus (CF) という3種類をマークする機能がある、と主張できる。また、「は」で示されるトピックは、トピック素性に駆動される操作であり、「は」で示される句、あるいはスクランブリング操作の適用を受ける句は、フォーカス素性に駆動される義務的な移動である、と主張することができる。更に、韓国語、ペルシャ語の例も分析し、本研究の提案が正しいことを支持する例も出した。

このような日本語の助詞「は」で示される句を意味機能に従って3分類する、と言う主張を、以下に挙げる学会において発表した。更に、英語のトピック・フォーカス構造を分析した論文は以下に挙げる学術図書に掲載された。

3. 研究成果の公表

3.1 論文

(1) 「トピックと焦点-「は」と「かき混ぜ要素」の構造と意味機能-」 2011 年 11 月『70 年代生成文法再認識-日本語研究の地平』, 207-229. (長谷川信子編、開拓社発行)

(2) 「英語におけるトピック・フォーカス構造について」 2012 年 2 月『ことばが語るもの-文学と言語学の試み』, 163-178. (米倉綽編、英宝社発行)

3.2 口頭発表

(1) 「Three kinds of *Wa*-marked phrases and Topic-Focus Articulation in Japanese」 2011 年 4 月、SWIGG 11-3rd Workshop on Generative Grammar, University of Geneva, Geneva, Switzerland. (この口頭発表を改訂した論文がジュネーブ大学言語学科発行の学術雑誌

Generative Grammar at Geneva ([GG@G](#) 7)に掲載される予定、審査通過済み、現在印刷中)

(2)「助詞「は」でマークされる句の意味と統語構造」2011 年 7 月、福岡言語学会 7 月例会、九州大学箱崎キャンパス。

〔個人研究〕

広島県備北地区における高大連携遠隔講義 ―遠隔講義受講者の意識調査および生涯学習への応用について―

生活科学部 生活デザイン・情報学科 准教授 中田 美喜子

はじめに

現在 e-learning や遠隔講義は様々な内容や形式で行われ、学習効果をあげている。特に遠隔講義については、離れた大学キャンパスにおける同時講義や、人数の多いクラスにおける遠隔講義併用開講などで実施され、大学間においては、それぞれの地域にある大学コンソシアムで実施している単位互換における科目の中で開講している^{[1][2]}。現在までの報告では、遠隔講義はインターネットの回線速度及び機材の性能などに依存しており、機器の進歩により改善が多く認められる^[3]。広島における大学コンソシアムでは、備北地区の高校の人材育成を支援するため、高大連携による大学の講義を高校で聴こうという遠隔講義を企画し実施してきた。本研究においてはこの実施を補助し研究対象としてきたので報告する。

方法

2011 年度では、2010 年度から高等学校のカリキュラムに含めた開講方式の継続であった。講義方法については、一定条件を確立させていたが、大学の教員ごとに異なる方式をとられる場合もあった。講義時間は 45 分、高校の授業時間なので短くまとめる。できるだけ双方向の講義を行うなどであった。インターネット回線については、高校既存の回線では音声途切れるため、別回線を設置して実施した。さらに高校では、教室にソフトを勝手にインストールすることは認められていないため、機材は持込を行わないと遠隔講義が実施できないのが現状である。¹

授業は、高校・大学へそれぞれ技術サポート人員を各 1 名配置して機材を設置した。大学によっては、職員が機材設置を担当し技術補助を希望しない大学もあった。日本文学、経済関連、健康関連講義など 2011 年前期 5 科目、後期 5 科目を 2 高校へ配信した。授業終了後、高校側教員、生徒および大学教員にアンケートを実施した。

結果

高校生へのアンケート調査の結果、「通常の授業と大差なく無理なく遠隔授業を受けることが

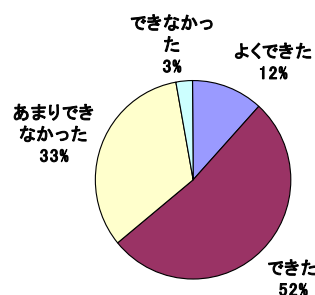


図 1 通常の授業と大差なく無理なく遠隔授業を受けることができましたか。

¹ 全国の公立高校では、コンピュータ教室の運用について様々な制限が設定されている。校内の PC・USB メモリの持ち出しは認められていない。外部の持込 PC・USB も認めない場合も多い。さらに高校の教室 PC にソフトを追加インストールすることは困難である。ブラウザの設定についてもフィルタリングを行っているなど、様々な仕様で運用を実施している。高校ごとにこれらの条件を事前に伺い、各高校の仕様にそった範囲で利用できる遠隔講義を提供している。

できましたか」はよくできた・できたが 64%であった(図 1)。「あなたはこの授業の内容を理解できましたか」では、97.9%の生徒が理解できた・ほとんど理解できたと回答した。「今回の授業は将来の進路の選択に役に立ちそうですか」では、91.5%の生徒が大変役に立ちそう・少し役に立ちそうと回答した。

自由記述について、「思ったより良く、近くに先生がいるようだった」「楽しかった」「普通の授業とかわりなかった」など肯定的な回答が多く認められた。また、「コミュニケーションがとりづらい」といった回答も数名あげられていた。

大学教員のアンケートでは、「おもしろい講義を体験できてよかった」とするものから、「近くに生徒がいなかったため様子が分かりにくくやりづらい」とした意見もあった。

まとめ

高大連携による遠隔授業の結果、高校生は興味深く授業を受講できることが可能であった。各大学で、経費を負担しあって実施している講義であるため、高校側の要望に即座に対応することは困難であるが、できるだけ大学コンソシアムで協力して連携講義を継続していくことが必要であると思われる。また、広島県備北地区においては、インターネットそのもののインフラに地域格差があることが認められた。今後は、インフラ整備の必要性を行政などに訴えていくとともに、過疎地への生涯学習などの要望にも対応する必要があると思われる。

参考文献

- [1] 大島修,「5 年目を迎える岡山理科大学との単位認定を伴う高大連携遠隔授業(遠隔授業による教育の連携, 日本教育情報学会第 22 回年会)」, 日本教育情報学会, 年会論文集 (22) pp.6-7, 2006
- [2] 中田美喜子, 永田純一,「遠隔教育による単位互換科目—ブログと e-learning を用いて—」, pp.47-50, 平成 18 年年度情報教育研究集会講演論文集, 2006
- [3] 中田美喜子,「インターネットを利用した遠隔教育--技術的進歩と受講者の意識について」 広島女学院大学論集, 58, pp.153~164, 2008

〔個人研究〕

幼児と保護者における身体活動量の関連性

－幼児の身体活動向上のための支援へ向けて－

文学部 幼児教育心理学科 講師 田中 沙織

1. 研究目的と意義

本研究では、保育所・幼稚園の違いを踏まえながら、幼児と保護者の生活リズムおよび身体活動量の関連性を検討することで、幼児の身体活動量減少の要因並びに幼児の身体活動向上に向けた支援を探ることを目的とする。本研究の成果によって保護者と幼児の身体活動の関連性が明らかになることにより、家庭における身体活動を向上のための保護者に対する啓発が可能となる。本研究終了後は、本研究の結果及び先駆的地域での取り組みを基に、さらなる幼児の身体活動向上に向けた支援及び介入研究につなげるための基礎資料とする。

2. 研究の概要

1) 身体活動量測定

保育所及び幼稚園に通う幼児とその保護者（全て母親であった）を調査対象とし、小型加速度計（Kenz 社製 LifecorderGS）を用いて身体活動を測定した。保護者と幼児の身体活動の分析には Lifecorder GS 用解析ソフト Lifelyzer05 Coach を使用し、期間中の身体活動量、活動時間、消費カロリー、運動強度の側面から検討した。

2) 生活リズム調査

幼児及び母親の生活リズムに関するアンケート、生活リズムと運動に関する意識についてアンケート調査を行なった。さらに幼児と母親の1週間の生活記録を記録表に記述してもらった。

3) 先駆的地域の視察

2011年にイギリスにおいて発表された、幼児の身体活動ガイドラインがイギリスの幼児教育関係者にどのように受容され、どのように家庭へ啓発されようとしているのかについて、Nueseryに勤務する保育資格を持った保育士を対象にM-GTAを用いた質的調査を行なった。

3. 研究経過

家庭における親子の意識や過ごし方によって、子どもの身体活動は影響を受けることから、母親の身体活動に対する意識を変えることで子どもの身体活動を促すことが期待できる。特に、幼児の運動強度については母親の運動量、運動強度と関連が見られたことから、幼児の身体活動を促進するために、母親が意識的に身体活動をすることが有効であると考えられる。加えて、保育園児と幼稚園児において平日の身体活動量に差が見られなかったことから、特に家庭で過ごす時間が長い休日の身体活動が重要になるといえる。

先駆的地域の実践事例にもあるように、身体活動に関する保護者への啓発を行なう場合には、「保護者から子どもに運動遊びの楽しさを伝えてもらう」という視点から「親子で運

動の楽しさを知る」という視点への変換が家庭での身体活動が向上することにつながると考えられる。今後は、実際に身体活動を行うための実践的な取り組み方法についても検討する必要がある。

研究結果については、以下のように公表している。

田中沙織（2010）幼児とその保護者における身体活動の関連についての研究-降園後の身体活動を中心に-，広島女学院大学論集，60，69-77.

田中沙織（2011）幼児とその保護者における身体活動の関連についての研究Ⅱ-幼稚園児と保育園児の比較から-，広島女学院大学論集，61，83-94.

田中沙織（2012）イギリスの身体活動ガイドラインにみる幼年期の身体活動に関する一考察-M-G T Aを手法として-，第10回日本発育発達学会（於 名古屋学院大学）.

〔個人研究〕

アンチモダンとしてのサド

文学部 日本語日本文学科 教授 宮本 陽子

1. 研究目的と意義

アントワヌ・コンパニョンが『アンチモデルヌ』においてサドをアンチモダンの作家として位置づけてから久しいが、コンパニョンの判断がクロソフスキーの考察に基づいている点に問題がある。サドをアンチモダンとするのであれば、クロソフスキーに寄りかからず、アンチルソー、アンチフランス革命という視点から洗い直すべきである。正しい基準に基づいてサドのアンチモダン性を問い直すというのが本研究の目的である。

2. 研究方法

サドが作家として頂点を極めるのは 1795 年前後であるが、94 年 12 月に逮捕されるまで彼は革命政府下のピック地区で書記長、議長を勤めていた。この時期の著作を正しく読むためにはサドとジャコバンの関係を考察しなければならない。特にロベスピエールとの関わりを探る必要があるが、本年度はサドが 1795 年に発表した『アリーヌとヴァルクール』、『閨房哲学』、および同年から準備し 1799 年（？）に発表する『ジュリエット物語』と人権宣言の序文の比較をした。

3. 研究経過

2011 年度は京都大学での「1793 年の政治文書を読む」会に参加し、ロベスピエールやサン＝ジュストの文章を読むかわら、『アリーヌとヴァルクール』、『閨房哲学』、『ジュリエット物語』と人権宣言の言葉を比較しながら、サドがアンチフランス革命と言われつつも、革命家たちと同じ言葉を使っていることを考察し、論文にまとめた。

研究会に参加しながらサドを読むことによって、革命家もアンチルソーを標榜しているサドもルソーの影響のなかで考え、書いているという印象を拭えなくなった。そうした意味ではルソーを近代思想の根源としたコンパニョンは正しい。

革命に対するサドの関わりで興味深いのは、『閨房哲学』と『ジュリエット物語』において、作中の時間軸に狂いが生じていることである。すなわち、同一作品において、革命前の物語のなかに、革命後の出来事、話題が闖入しているのである。ロベスピエール等革命家の文章を読み進め、サドが援用するドルバックやラメトリ、ビュフォン等において無神論的言説を改めながら、サドにおける時間軸の混乱をさらに考察し、サドと革命の関係を捉えたい。

4. 今年度の研究成果

論文：宮本陽子「革命のエクリチュール」、米倉綽編著『ことばが語るもの 文学と言語学の試み』、英宝社、2012 年 3 月、35 - 86 頁

[個人研究]

Bochner 可積分関数の多次元上の開領域での本質的有界変動の特徴付けに関する研究

生活科学部 生活デザイン・情報学科 教授 橋本 一夫

1. 研究の目的

本研究は日本人研究者 岡崎悦明・本田あおい・佐藤坦氏の研究「An L_p -function determines ℓ_p 」(Proc. Japan Acad. Ser. A 84, 2008, pp.49–41) に触発された。彼らはこの論文で、ある数列空間の部分集合 $\Lambda_p(f)$ の線形性の特徴付けに興味を持ち、 f が L_p 関数のときの $\Lambda_p(f) = \ell_p$ となるための特徴付けを与えている。 $p > 1$ の場合には、完全な特徴付けが得られるが、 $p = 1$ の場合ではその限りではなかった。有界変動関数を導入することで、我々は 1 以上のすべての p に対してその特徴づけを与えることに成功した。これ等の結果については「On the linearity of some sets of sequences defined by L_p -functions and L_1 -functions determining ℓ_1 」として日本学士紀要 (Proc. Japan Acad., Vol.87, Ser.A, No.5(2011)) から出版された。本研究は領域並びに次元を一般化し、大きく分けて次の 3 つのケースへの応用を試みることである：

- (1) $p \geq 1$ に拡張.
- (2) 定義領域を全空間から一般の開領域 (開集合): $(\mathbb{R} \text{ 或いは } \mathbb{R}^N)$ から Ω .
- (3) 多次元領域に拡張: \mathbb{R} から \mathbb{R}^N .

2. 研究経過

今年度では、研究目的で述べた (1) の $p \geq 1$ への拡張と (2) の 1 次元の場合、全空間 \mathbb{R} から \mathbb{R} の一般の開領域への拡張が得られた。この結果については、現在論文として発表予定である。

3. 研究成果の公表

[論文]

1. On minimal von Neumann–Jordan constant by renorming, Gen Nakamura and Kazuo Hashimoto, Proceedings of the International Symposium on Banach and Function Spaces , pp.421 - 430, (2011)(査読有)
2. On the linearity of some sets of sequences defined by L_p -functions and L_1 -functions determining ℓ_1 , Gen Nakamura and Kazuo Hashimoto, Proc. Japan Acad. Ser. A Math. Sci. **87**(5), 77–82, (2011)(査読有)

[口頭発表]

1. 「On essential bounded variation of $L_p(\mathbb{R})$ 」, 2011 年度日本数学会秋季総合分科会, 2011 年 9 月 29 日 (水)(信州大学理学部).

〔個人研究〕

幼児期に行う「ヌード（裸体像）デッサン」が引き出す効果について

文学部 幼児教育心理学科 准教授 三桝 正典

1. 研究目的

本研究は、幼児期の鑑賞題材を身の周りのものだけではなく、美術作品にも広げ、美術館という特別な空間において実物の彫刻作品の「ヌード（裸体像）」を色々な視点から鑑賞し、デッサンを行うことを通し、そこから創り出される色々な発見や発想などを手がかりとして、幼児が本来もっている創造性や表現力などを引き出すことを目的とするものである。

2. 研究方法

1年次では、主に色々な幼稚園・保育園の鑑賞教育の現状把握、分析、ひろしま美術館での鑑賞授業実践、2年次は、1年次の収集資料や実践データの分析・まとめを行う計画で進めていく。

3. 研究過程

ひろしま美術館において、「裸体像」のデッサン教材としてマイヨールのブロンズ像「ビーナス」を用いて鑑賞～表現授業実践を行った。

2011年6月13日（月）11:00～11:30

聖モニカ幼稚園 年長園児 51名

ひろしま美術館中央ホールに展示しているマイヨール作のブロンズ像「ビーナス」を色々な角度から見て、「作品（裸体像）との対話」のテーマを加え、感じたことをパネルに描いていく活動を行った。通常の立体像をスケッチする場合は、作品の正面を描く場合が多いが、対話を通して色々な角度から見ることにより、正面だけではないデッサンの場所を選ぶ園児が多く見られた。また、デッサンする場所を固定せず、移動しながらデッサンしえた園児もいた。授業実践の詳細は、広島女学院大学論集第61集（pp.71-82）で紹介している。来年度は、引き続きひろしま美術館での鑑賞活動の実践を継続し、幼児期に行う「ヌード（裸体像）デッサン」が引き出す効果についてまとめていきたい。



作品との対話



園児のデッサン作品

〔個人研究〕

教師のコミュニケーション能力開発

生活科学部生活デザイン・情報学科 教授 石井 三恵

1. 研究目的と意義

1960 年以降、日本においても女性学やジェンダー論の視点から、コミュニケーションの必要性に関する報告・研究は積み重ねられてきた。しかし、現実をよりよく生きるための意思決定という視点でのコミュニケーション研究は進んでいないと考える。また、教育現場においても、教師が児童・生徒・学生に対してだけでなく、保護者とのコミュニケーション不足ならびに不全から生じる問題が表面化してきたことは明らかである。多様化社会といわれる現代において、人間形成を主眼とした教育はますます重要であるといえよう。教師と児童・生徒・学生、そして保護者と地域の人々による教育コミュニティの再生を図るために、第一に教育を行なう教師のコミュニケーション能力の開発を中心に、プレゼンテーション能力の開発、ならびに人間関係構築の方法論を明らかにすることを目的とした研究を行なう。

2. 研究方法

- 1) 日本の教師のコミュニケーションの課題を明確にするため、教師へのインタビュー調査を実施する。
- 2) コミュニケーション能力向上のためのプログラムを作成し、インタビュー調査に協力してくださった教師に意見を求める。
- 3) 海外の教師のコミュニケーションの現状を調査し、北米型コミュニケーションと北欧型コミュニケーションとの比較を行なう。
- 4) コミュニケーションを基盤としたプレゼンテーション能力を向上させるためのプログラムを作成する。

3. 研究経過

- 1) 教師へのインタビュー調査
教師が抱えているコミュニケーションに関する課題を明らかにするため、コミュニケーション能力向上の必要性を感じている教師にインタビューを行なった。
- 2) 調査研究実施国での研究体制の確認
北米型コミュニケーション研究を中心とし、これまでの予備調査に基づいた確認作業を行なった。
- 3) 2012 年度の予定
北欧型コミュニケーション研究を中心とし、北米型コミュニケーションとの比較を行い、プログラム作成を行う。

〔個人研究〕

広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受容過程の比較研究

生活科学部生活デザイン・情報学科教授 末永 航

1. 研究目的と意義

われわれが「戦後」と呼ぶ 20 世紀後半以降は、世界的に見ても「美術」が美術館を出て公園や街路に展開し、「建築」がひとつの建物から都市に拡張され、公共空間が造形芸術の場として重要な役割を果たすことになった時期にあたる。

公共空間における造形活動（造園・建築・記念碑・彫刻など）は今日、住民の自己認識を表し、ときには観光の対象となるなど、日本の地域社会の中でもますますその重要性を増してきている。

ことに第二次大戦後の日本では、記憶の継承、中でも戦災のそれが最大の課題であり、その後に「アート」を利用した地域振興が計られてきた。

この研究では、この両段階について広島を中心とする公共空間の造形活動を対象とし、計画、実施、そして受容の過程を詳細に調査する。さらに、同様に大きな戦災を受けた長崎、沖縄ほかの様態との比較を行うことによって、現代日本の公共空間美術の特徴的一面を明らかにすることを目的としている。

アート・イベントが隆盛を迎えている現在、さらなる将来を構想するためには、現状に至った現代の歴史を正確に理解することが資するところは大きいと考える。

2. 研究方法

広島・長崎・沖縄を中心に戦災および災害のモニュメントとしての意義をもつ建築・彫刻などの作品の存在を確認し、写真撮影の上カタログ化を行う。また作者、作品に関する資料・文献調査、聞き取り調査などを実施する一方、受容者の反応を各時期の新聞、雑誌、インタビューなどで探索する。

3. 研究経過

2011 年度は東京、大阪で展覧会調査、資料・文献調査、関連学会出席などを実施し、長崎、沖縄でも実地調査を行った。文献の収集も相当進捗した。また関係の新聞・雑誌記事のスクラップ作業と過去 10 年程度のスクラップの整理作業がほぼ完成し、近年については年次ごとに資料を利用できる状態になった。

これらの成果を踏まえ、2012 年度は劈頭から倉敷市立美術館で丹下健三作品を中心とする連続講演を予定しているが、さらに各地の調査を行い、広島を中心に公文書などの一次資料の収集につとめたい。また震災後の東北の記念物についてもその生成過程を注視する。年度末までに論文として一部をまとめる予定である。

〔個人研究〕

建築家の思索にみる現象としての空間へのアプローチと生活世界のつきつめ方

生活科学部 生活デザイン・情報学科 准教授 小野 育雄

1. 研究の目的および意義

空間を建築課題の中心に初めて見据えた著作が 20 世紀前半にあらわれる。しかしそれらは空間を客体的素材とする素朴な段階に留まっていたり、空間概念が厳密な学的検討を経ないままの粗雑なものであった。それらは建築という概念（既成概念）再検討にかかわるかたちで出てきた空間論であった。その後、根本的に空間概念を反省、制作しようとする者のなかに、一切の概念的加工以前の空間経験へ接近し、根本的に空間が問題にされるべき領野（ここで言う〈生活世界〉）を視野に収めてのうえでなければ思索＝制作は始められない、という姿をもつ者たちがあらわれてくる。かれらにおいては、空間経験が主題化される一般的な事情を 20 世紀初頭以降の哲学・思想に見て、その哲学・思想を基盤とする建築空間論へと建築的思索を進めることが構想されることになるのである。建築家スティーヴン・ホールや増田友也等にはその流れを自らの内に受けとめている気配がある。本研究期間内に、ホールや増田等の建築家の思索のさらなる解明へ研究展開できればと考えている。本研究の展開の公開によって、現代行なわれようとしている建築することにおいて、個別の制作者ごとに、より善きインスピレーションを喚起できるであろうことが、意義である。同時に本研究の展開の公開を通して、制作品とともに生きる人びとに、かれらが 20 世紀初頭以降の哲学・思想の謂う〈生活世界〉をときに開きやすく、感得しやすくすることが、意義である。

2. 研究方法

建築家ホール、増田等における作品の水準・出来ばえを問題とはしない。かれらは自らの蘇生の道を手探りするかのように実作をくり返すが、その作品化という実践において実現をめざす方向性を本研究では問題としており、かれらの論理（ロゴス）にその方向性をみとめていく。ゆえに研究の重要な素材はかれらの建築することのなかでの言葉であり、それを 20 世紀初頭以降の哲学・思想についての理解と連動して構造解明するという方法をとる。

3. 研究経過等

2011 年度・2012 年度の 2 年度にわたる助成申請である。研究資料の新規の収集・整理・分析とともに、本研究の展開の公開となる著作の仕上げ（2012 年 4 月以降出版確定）、及び、2011 年 8 月 24 日に日本建築学会大会（関東；早稲田大学）において「増田友也に於ける存在することと建築することとの思索」（『梗概集』F-2、建築歴史・意匠、787-788 頁）と題して本研究発表としての学術講演を行なった。これが 2011 年度の研究概況である。

〔個人研究〕

Western Women Write about Meiji Japan

文学部 英米言語文化学科 教授 Ronald D. Klein

Purpose: This research project identified 10 outstanding women sojourners to Japan and marked their contributions to Japanese cultural understanding. All wrote books for the West that helped explain Japanese society and culture. Some were explanations of Japanese culture (Whitney, Stopes); some were personal observations of daily life (d'Anethan, Fraser); some aimed at explaining Japan to young children in the West (Hartshorne) and some were overt explanations of missionary life and Christian issues in Japan (Denton, Apcar). In order to gain insight into these women's lives in Japan, it was necessary to explore their backgrounds. This would yield important personal information, add details to their work and show their relationships with other women and institutions in Japan.

Process: Most of the targeted women were British citizens, so finding background materials required two trips to England, one by each of the two researchers—Klein and Herbert. Herbert's trip focused on Charlotte Salwey, Diana Apcar and Marie Stopes, with stops at the British Library (London), and Brockenhurst. Klein's trip focused on missionaries from the Church Missionary Society archives (Oxford), and archives of diplomat wives (d'Anethan, Fraser) in the Japan Society archives (London) and British Library.

Results: At the British Library, Herbert found materials by and about Ethel Howard and Marie Stopes. He also discovered a remote war monument established by Charlotte Salwey in Brockenhurst. Klein's trip to the Church Missionary Society headquarters in Oxford led to the discovery of the complete collections of yearly letters from the field of CMS's missionaries. 500 pages of all letters from missionaries in Japan, from 1887-1912 were photocopied and sent to Japan. The Japan Society provided useful copies of their series of Biographical Portraits of noteworthy Japanese and British citizens who contributed to mutual understanding. Some of these portraits were among the present research targets, providing useful background information.

〔共同研究〕

食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー予防の新規栄養管理の構築

生活科学部 管理栄養学科 専任講師 妻木 陽子

1. 研究の目的および意義

本研究は、食物アレルギー患者の食事管理の実態を把握し、食生活上での改善を図ることを目的とするとともに、食事タンパク質中の必須アミノ酸が食物アレルギーの発症に及ぼす影響について検討することで、食物アレルギー発症の予防またはアレルギー症状の進展を遅延させることが可能な、食物アレルギー患者の栄養管理法の基盤を構築するものとする。

2. 研究の方法

1) 食物アレルギー患者の食事管理に対する実態調査を行うため、食物アレルギー患者を持つ家族を対象とした無記名のアンケート調査を実施した。対象者は、食物アレルギー患者の父親とし、日ごろ家庭内において食事管理に携わらないと考えられる父親に対して管理栄養士による料理教室およびアレルギー専門医による講演会を実施し、参加前後における食物アレルギーに対する知識および食事管理に対する意識や行動の変化について検討を行った。

2) 食事タンパク質中の必須アミノ酸であるヒスチジンが、食物アレルギーの発症に及ぼす影響について予備実験を行った。実験では、肥満細胞培養株（RBL-2H3）にヒスチジンを添加し、終濃度を 0.5 および 1 mM とし、RT-PCR（reverse transcription-polymerase chain reaction）法を用い、RBL-2H3 細胞内におけるヒスチジン脱炭酸酵素（histidine decarboxylase; HDC）の遺伝子発現およびヒスチジン輸送体として知られる PHT（peptide/histidine transporter）1 および PHT2 の遺伝子発現を検討した。

3. 研究の経過

1) アンケートの結果より、対象者 5 名すべてにおいて、料理教室および講演会参加後に食事管理に対する意識の変化が認められた。また、5 名中 4 名が「食事に関心をもつようになった」、3 名が「積極的に調理をしようと思うようになった」と回答した。このことから、対象者を行動変容段階モデルに当てはめると、料理教室および講演会参加前には、無関心期または関心期に位置していたのに対し、参加後は準備期または実行期へと移行している可能性が示唆された。小児の食物アレルギー患者の場合、食事管理は保護者へ依存する部分が多く、家庭内での理解が不可欠である。今後さらに家庭内での実態を把握し、食物アレルギー患者の食生活の改善を図るために適切な栄養管理の在り方について検討する。

2) RT-PCR 法の結果より、ヒスチジンの添加により HDC の発現が増減することが明らかとなった。また、RBL-2H3 細胞において、PHT1 の発現は確認されたが、PHT2 の発現は確認されなかった。このことから、RBL-2H3 細胞においてヒスチジンの輸送には PHT1 のみ関与している可能性が示唆された。しかし、一定の見解は得られていないため、今後は他の必須アミノ酸との比較を含め詳細な検討を行う。

〔共同研究〕

大学組織運営における FD・SD の実践的課題に関する学際的研究

文学部 幼児教育心理学科 教授 松浦 正博

I. 研究目的

ヨーロッパでは、EU の成立以後、高等教育における教育の枠組みの統一と均一が求められるようになった。その具体的現れが、1999年にボローニャ大学で採択されたいわゆる「ボローニャ宣言」である。2010年までに欧州高等教育圏を確立することを目指すとしたボローニャ・テーゼがそれである。以後、教育の質保障、教育の制度的統一性・均一性が求められるようになってきた。このことは、単に EU 諸国の問題だけでなく他の国々、地域の高等教育のあり方にも大きな影響を与えることとなった。

本研究は、こうした動向の中で、近年のわが国をめぐる高等教育の質保障の問題、管理・運営の問題、特に FD・SD の基本的課題、方向性を視野に入れながら本学における FD・SD の方向性を具体的に見定めようとするものである。

II. 研究経過

本年度は、上記研究テーマにそって（１）高等教育に関する国レベルでの政策上の現状を把握する。（２）わが国の各大学における FD・SD の実践例を調査、分析すること。（３）各大学での FD・SD の試みを考察することにより、本学におけるそれらの方向性について手がかりを把握することに努めた。

その具体的活動として以下の調査、文献収集を行った。

- 第82回公開研究会 （京都大学高等教育研究開発センター主催、2011年12月1日(木)） 石井三恵教授参加

第4回「基礎学力の向上のための FD・SD」研修会（主催：教育ネットワーク中国、
於：広島修道大学、日時：2012年2月24日（金）） 等

- 文献収集

江原武一、杉本均 編著『大学の管理運営改革』東信堂、2005
他 55冊

なお、次年度は調査結果を報告書にまとめるとともに、学内での公開講演会及び研究会、学会等で発表する予定である。

〔学術図書出版〕

大場美和子著

『接触場面における三者会話の研究』

(ひつじ書房 2012 年 2 月発行)

本書は、接触場面と内的場面の三者自由会話を対象に、話題開始の発話とそれに応答する発話に着目し、発話者、発話の方向、発話の種類、参加者の情報量という観点から分類を行い、二者会話とは異なる三者会話の実態を探ったものである。留学生が 2 人の日本人学生と日本語で話すのは困難なようではあるが、データからは参加者の役割調整の負担の軽減も観察され、多様な会話への参加の実態を教育現場で活用する可能性を示唆している。

なお、本書は、2011 年 3 月に千葉大学大学院人文社会科学研究科より学位を授与された博士論文「内的場面と接触場面における三者自由会話への参加の調整－談話・情報・言語ホストの役割の分析－」に加筆修正を行ったものである。

目 次

第 1 章	研究課題と研究の理論的背景
第 2 章	データ収集の条件と方法
第 3 章	話題開始の発話と談話上の役割の調整
第 4 章	応答の発話と情報上の役割の調整
第 5 章	応答の発話と言語ホストの役割の調整
第 6 章	三者自由会話における役割の調整
参考文献	
資料	話題開始と応答の発話の集計結果

〔学術図書出版〕

米倉綽編著

『ことばが語るもの—文学と言語学の試み—』

(英宝社 2012 年 2 月 18 日発行)

本研究は 2012 年 4 月 1 日に開設される新学部「国際教養学部・国際教養学科」の設置趣旨に沿った研究を目的として企画されたものである。つまり、従来の学科制という枠を超えて、本学の現文学部の教員がお互いにそれぞれの専門分野を活かしつつ、関連する内容について自由に意見交換をし、文学や言語学への理解を深めることを目的とした研究である。これは、新設される「国際教養学部」がいわゆる従来の一般教養としての「教養」ではなく、高度な専門性をもった、そして、国際的な視野に基づく学部であるという設置趣旨を、2012 年 4 月 1 日開設に先立って実践したものと言える。

この意味では、現文学部のもっと多くの教員の研究成果を文字の形にすべきだったが、限られた出版経費のなかでは、8 名の教員に限定せざるを得なかった。各教員の研究成果は次のようなものである。

○ 金田文雄 「閉じられた円環、開かれた円環——「朝日歌壇」の 3 人の歌人——」

朝日歌壇に登場する 3 名の歌人を取りあげて、それぞれの歌の文学的・社会的意義を詳細に論述し、いわゆるホームレス歌人といわれるひとたちの登場により、これまでごく限られた読者層であった新聞歌壇を「閉じられた円環」から「開かれた円環」に変貌させたと指摘している。

○ 宮本陽子 「革命のエクリチュール」

サドの二つの「哲学小説」を取りあげ、その二つの作品がまったく別の状況下で書かれたことを、自由と平等の理想を掲げたフランス革命と本来は民衆の要求によって始まった「恐怖政治」との観点から論述している。つまり、サドの革命批判やロベスピエール批判を、この二つの作品を通して明らかにしているのである。

○ 森あおい 「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷」

アフリカ系アメリカ人世代の作家コルソン・ホワイテッドの半自伝的小説『サグ・ハーバー』を通して、文学に音楽を取り入れたこの作品が、多様な異なる価値観を重視する新たな人種意識を創りだしたと指摘する。この事実を考慮すれば、アフリカ系アメリカ人であるバラク・オバマが大統領に選ばれたのは、必然的結果とも言えると主張。

○ 山内理恵 「D.H.ロレンスから見たシャーロット・ブロンテ（書簡編）」

D.H.ロレンスが書簡の中でシャーロット・ブロンテに言及していることに注目し、最初はシャーロットの作品における表現を高く評価していたロレンスが、『ジェーン・エア』の人物描写を通して、シャーロットへの評価に変化をみせる様子を克明に論述している。

○ 金田仁秀 「水辺の誘惑——美しい身体と同性愛」

ルネッサンスから 19 世紀および 20 世紀の文学作品を取り上げて、イギリスにおける

水辺と同性愛の関係を考察している。レズビアンやゲイを扱った作品とは、どのようなものをいうのか、という問題は答えを見つけにくい課題であり、例えばシェイクスピアの有名な詩『ソネット』は男性間の情熱を謳いあげた作品でありながら、ゲイの詩であるとは解釈されない。ここでは、具体的にいくつかの作品を分析し、「水辺」をキーワードに同性愛文学の本質を追求している。

○ 中村浩一郎 「英語におけるトピック・フォーカス構造について」

近年、様々な言語のトピック・フォーカス構造に関する研究の成果が発表されている。本論考ではこれらの研究で明らかにされているイタリア語、ハンガリー語のトピック・フォーカス構造を精査した上で、日本語との比較をしながら、現代英語のトピック・フォーカス構造とはどのような特質を持っているかを具体的に論述している。

○ 山本武史 「ソノリティーによる言語現象の一般化」

ソノリティー、つまり言語を構成する分節音の「聞こえ度」、もう少し分かりやすくいえば、「音のひびき」の度合いを、音声学的にどのように捉えるべきかを考察している。このソノリティーのスケールについてのいくつかの言説を検討した上で、日本語の場合と比較しながら、英語のソノリティースケールについて、接尾辞付加や詩の韻律構造も考慮しながら、筆者独自の見解を示している。

○ 米倉綽 「後期中英語における接尾辞の生産性」

ノルマン人による英国征服によって中英語は大きな影響を受けることになる。特に、語彙を構成する語形成には顕著な変化がもたらされる。本論考では、この語形成に関する変化を、二つの競合する接尾辞 *-ity* と *-ness* に焦点を絞って、これらの接尾辞の意味と生産性の相違および原因を明らかにし、ここでの事実が他の語形成にも言えることを指摘している。

以上8篇の論文の内容を概観したが、そのうちの6篇は英米言語文学に関するものである。この点からみると、冒頭で述べた専門分野を超えた広く深い、そして高度な「教養」研究といえるかという反論が予想されるが、各論考は、日本語はもとより、フランス語、ラテン語、イタリア語など、英語以外の言語や文学との関連での考察であり、高度な専門性をもった「国際教養」の研究成果と自負している。

[文責：編著者 米倉綽]

2012年3月15日

IV. 2011 年度広島女学院大学学術研究特別助成報告

1. 中村 浩一郎 英米言語文化学科 教授

「ピックと焦点：「は」と「かき混ぜ要素」の構造と意味機能」

長谷川信子編『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』

開拓社, 2011 pp.207-229

2. 橋本 一夫 生活科学部(※) 教授

On minimal von Neumann-Jordan constant by renorming

Proceedings of the International Symposium on Banach and Function

Spaces III, 2011, pp.421-430

3. 橋本 一夫 生活科学部(※) 教授

On the linearity of some sets of sequences defined by L_p functions and
 L_1 -functions determining ℓ_1

Proceedings of Japan Academy(日本学士院紀要), Vol.87, Series A No.5

Mathematical Sciences

(※)2012 年 4 月より人間生活学部所属

V. 2010 年度広島女学院大学学術研究助成

【研究成果報告】

〔基盤研究〕

・瀬山 一正 テーマ 食を通じた精神活動制御の試み

成 果 1) 学会誌等

A.Knabara, M.Hakoda & I.Seyama.

Urine alkalization facilitates uric acid excretion.
Nutrition Journal 9:45 (2010).

神原彩、瀬山一正. 「尿アルカリ化による尿中尿酸排泄量の増加
の栄養学的意義」 『広島女学院大学論集』 第 60
集、2010 年 12 月、141-149.

A.Knabara, & I.Seyama. Effect of urine pH on uric acid excretion by
manipulating food materials. *NUCLEOS.NUCLEOT.
NUCL* 30:1066-1071. 2011

下岡 里恵、神原彩、瀬山一正. 「恵運動負荷とエネルギー代謝
調節機構」 『広島女学院大学論集』 第 61 集、2011
年 12 月、155-166.

2) 口頭発表

I. Seyama & A. Kanbara. Effect of change in urine pH by
manipulating food materials on urinary acid excretion.
14th Int. Symp. on Purine and Pyrimidine Met. in
Man(2010). 2010 年 2 月.

神原彩、三浦芳助、瀬山一正. 尿 pH の尿酸排泄への影響. 第
45 回日本痛風・核酸代謝学会総会. 2012 年 2 月.

〔個人研究〕

・石井三恵 テーマ 意思決定のためのコミュニケーション

ーフィンランド女性の社会参画を中心としてー

成 果 1)学会誌等

石井 三恵 「意思決定のためのコミュニケーションーフィンランド女性の社会参画を中心としてー」『広島女学院大学論集』第61集、2011年12月、pp.113-130.

3)その他

石井 三恵 「女性のためのアサーティブ・トレーニング」広島大学男女共同参画推進室・女性研究者支援プロジェクト (CAPWR)主催、2009年10月、東広島キャンパス/霞キャンパス

石井 三恵 「気持ちをことばにする」広島県尾道南高等学校(平成21年度文部科学省人権教育研究指定校)、2010年2月

石井 三恵 「あなたは大切にされていますかーそれって愛? デートDV?ー」広島市男女共同参画推進室、2011年2月

石井 三恵 「生徒一人ひとりを大切にする人権教育についてーアサーティブなコミュニケーションを通してー」第1回広島県中学校人権教育研究大会記念講演、2011年10月、三次市立君田中学校

石井 三恵 「Leadership of Women as Decision-Makers Based on Communication :Focus on the Ageing and Declining Birthrate in Japan」、中国教育国際交流協会、厦門大学、中国伝媒大学主催『第5回世界大学女性学長会議』、(招聘: Keynote Speech) 2011年11月、厦門大学

・ R.クライン テーマ Western Women Write about Meiji Japan

成 果 1)学会誌等

Klein, Ronald. "Travel Writing from Post-Perry Japan: Visitors,

Residents and Globetrotters” *Studies in English Language and Literature*. Vol 18 March 2010.

Klein, Ronald. “Western Women Tourists Write About Meiji Japan, Part I” *HJU Graduate School Journal of Language and Culture* Vol 14 March 2011.

Klein, Ronald. “Images of Meiji Japan on the Western Stage (Acts I & II)” *Studies in English Language and Literature* Vol 19 March 2011

Klein, Ronald. “Western Women Tourists Write About Meiji Japan, Part I” *HJU Graduate School Journal of Language and Culture* Vol 15 March 2012.

・大場美和子 テーマ テレビニュースと取材の談話の構造の比較分析

成 果 1) 学会誌等

大場美和子 (2012) 『接触場面における三者会話の研究』 ひつじ書房

2) 口頭発表

大場美和子 (2010) 「取材の談話とテレビニュースの談話の比較－「国語に関する世論調査」に対する「専門家」の解説のつくられかた－」『社会言語科学会第 25 回大会論文集』 社会言語科学会 pp.244-247 (2010 年 3 月 13・14 日、慶應義塾大学)

大場美和子 (2011) 「テレビニュースの取材の談話における話題と質問の分析－「国語に関する世論調査」に対する「専門家」の解説のつくられかた－」『社会言語科学会第 27 回大会論文集』 社会言語科学会 pp.204-207

(2011 年 3 月 19・20 日に桜美林大学で開催される予定であったが、東日本大震災のため大会が中止となり、発表が許可され大会発表論文集に掲載されたことをもって発表を行ったものと同等にみなす特別

措置がとられた。)

中井陽子・大場美和子・寅丸真澄・加藤好崇・三牧陽子 (2012)

「会話データ分析のむこうー社会的貢献の可能性を考えるー」『社会言語科学会第 29 回大会論文集』
社会言語科学会 pp. 202-211 (2012 年 3 月 10・11 日、桜美林大学)

会話データ分析の社会的貢献の事例として「メディアの分析とそのむこう」(pp. 207-208) という題目で話題提供を行った。

- | | | |
|---------|-----|--|
| ・ 檜崎久美子 | テーマ | 伝統的装束の使用実態から見る意義と伝承に関する研究 |
| | 成果 | 1)口頭発表
檜崎久美子「現代における伝統的装束について - 祭祀舞装束を例に -」服飾文化学会 2009 年 9 月 奈良女子大学

檜崎久美子「祭祀舞装束について～実態調査とアンケートをもとに～」日本家政学会服飾史・服飾美学部会 2009 年 11 月 奈良女子大学

檜崎久美子「現代における伝統的装束について - 斎服を中心に -」服飾文化学会 2010 年 5 月 日本女子大学

檜崎久美子「伝統的装束の使用実態から見る意義と伝承に関する研究」服飾文化史研究会 2012 年 3 月 27 日 華頂短期大学

2)その他
檜崎久美子「祭祀舞装束について～実態調査とアンケートをもとに～」『日本家政学会服飾史・服飾美学部会会報』第 35 号 3-4 頁 日本家政学会服飾史・服飾史学部会 |
| ・ 三桝 正典 | テーマ | 幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的效果について |

成 果 1)学会誌等

三桝 正典「子どもの創造性を豊かにする鑑賞方法について
の一考察－「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く
活動を通して－」『広島女学院大学論集』第 60
集、2010 年 12 月、pp.43-55.

三桝 正典「幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的効
果について－「3 H美術教育」「創造的鑑賞」
に依拠した美術作品鑑賞を－」『広島女学院大
学論集』第 59 集、2009 年 12 月、pp.31-45.

2)その他

三桝 正典「造形あそびは楽しい」財団法人こども未来財
団 2011 年度 事業所内保育施設等保育従事
者研修会 2011 年 8 月 28 日 広島国際会議場

・宮本 陽子 テーマ メロドラマが育てた近代国民国家日本

－新聞小説作家としての紅葉から漱石まで

成 果 1)学会誌等

宮本陽子「言語共同体における新聞小説（『金色夜叉』の受
容について）」（1）研究ノート、『広島女学院
大学論集』第 59 集、97-104 頁

宮本陽子「女を殺したが『虞美人草』の男たち」、『広島女
学院大学大学院 言語文化論叢』第 14 号、2011
年 3 月、1-28 頁.

〔共同研究〕

・下岡 里英 テーマ 低体重および過体重学生の体格改善における栄養・食事指導の
効果

成 果 1)学会誌等

下岡里英、北島（森山）幸枝、市川知美、妻木陽子、瀬山一正、
「低体重および過体重学生の体格改善における栄養・食事指導
の効果」、『広島女学院大学生生活科学部紀要』第 19 号 2012
年 3 月 31-50 広島女学院大学生生活科学部

・小野 育雄 テーマ 建築家の思索にみる生活世界のつきつめ方

成 果 1) 学会誌等

小野 育雄「Toda の建築についての思索にみられる増田友也の成熟」『日本建築学会中国支部研究報告集』第 34 巻、2011 年 3 月、CD-ROM 版論文番号 929 号、pp. 865-868、日本建築学会中国支部発行

2) 口頭発表

小野 育雄「増田友也の建築思想——〈生活世界への還帰〉の発端」日本建築学会 2010 年度大会（北陸）学術講演、2010 年 9 月 10 日 富山大学

小野 育雄「Toda の建築についての思索にみられる増田友也の成熟」日本建築学会 2010 年度中国支部研究発表会、2011 年 3 月 6 日 徳山工業高等専門学校

3) その他

小野 育雄「増田友也の建築思想——〈生活世界への還帰〉の発端」『日本建築学会 2010 年度大会梗概集』2010 年 7 月、F-2、pp. 791-792、日本建築学会発行

VI. 専任研究員の活動報告

武政 孝治

(1) 室内環境評価・予測のためのデザインツールの研究

ESP-r は総合建築環境シミュレーションソフトウェアとして 1974 年からストラスクライド大学で開発されており現在では Open Source Software として GPL (Gnu Public Licence) の元で公開されている。また Radiance はローレンスバークレー研究所で開発された照明シミュレーションソフトウェアで、上述した ESP-r と同じく Open Source Software として GPL (Gnu Public Licence) の元で公開されており、これらは多くの研究者、実務家の間で利用されている。

しかし、日本ではこれらソフトウェアの知名度は低く、また、マニュアル等が英語であるためか ESP-r の利用者は皆無であり、Radiance は数本の博士論文に活用されている状態である。

筆者はこれらソフトウェアが日本でも広く活用される事を目的として、これらソフトウェアのもつポテンシャルを他のシミュレーションソフトウェアの結果との相互比較などを行い公開している。また、容易に利用できるように操作方法などをまとめ公開している。元来、これらソフトウェアは UNIX 上で開発が行われたためソースコードで配布が行われている。ソースコードからバイナリを作成するにはコンピュータ言語、OS の知識が必要であり一般ユーザーがバイナリのビルドを行う事は困難である。そこで、Windows、Mac OSX、Linux 用のバイナリをビルドし、ビルド方法及びバイナリを公開している。

現在では、釧路高専、北海道大学、東京大学大学院などで授業、ゼミなどに活用されている。

(2) 2011 年度の研究業績

○著書

小玉祐一郎、武政孝治、宮岡大、松元良枝著、『ESP-r と Radiance による建築環境シミュレーション入門』オーム社、2011 年 4 月

○口頭発表

武政孝治、宮岡大、松元良枝、小玉祐一郎「室内環境評価・予測のためのデザインツールの研究 その 1. PASSWORK と ESPr の比較」、日本建築学会大会学術講演会（関東）、2011 年 9 月

宮岡大、武政孝治、松元良枝、小玉祐一郎「室内環境評価・予測のためのデザインツールの研究 その 2 自然室温変動」日本建築学会大会学術講演会（関東）、2011 年 9 月

VII. 特別専任研究員の活動報告

郭 順伊

1. 学習支援

広島女学院大学図書館では〈新しい知のコミュニケーション広場〉として「ラーニング・コモンズ」(Learning Commons)という名称のもと、図書館 1 階に、旧新聞閲覧室にソファやパソコンを配置したくつろぎの空間「ハートフル・コモンズ」(Heartful Commons)、移動可能な机と椅子を用意した自習室「ジョイフル・コモンズ」(Joyful Commons)、自由パソコンコーナーの「ユースフル・コモンズ」(Useful Commons)が整えられ、2010 年 4 月より「ユースフル・コモンズ」に学習支援室を設置し、今年度は開室 2 年目となった。学習相談に応じる常駐のラーニング・アドバイザーは、昨年度と同様①日本語日本文学科卒、②英米言語文化学科卒、③管理栄養学科卒と、学生の多様なニーズに対応できる構成とした。

ラーニング・アドバイザーは学習支援室発足から 2 年目をむかえ、初年度の問題点を如何に解決するか思考しながら学生に対応し、大学生活における様々な問題が解決できるよう学生の立場に立った支援を行ってきた。以下に、2011 年度学習支援室の利用状況を報告し、今年度の活動を通して新たに見えてきた問題点や今後の目標について述べていく。

(1) 2011 年度結果報告

2011 年度の学習支援室稼働日数は計 194.5 日(午前：205 日 午後：183 日、半日を 0.5 日で計上)であり、支援学生総数は計 276 名であった。図書館の開閉に合わせ平日のみの開室とし、午前の部(9:00-11:30)と午後の部(12:30-19:30、30 分の休憩を含む)に分け、学習支援員のラーニング・アドバイザーが待機した。さらに、今年度は夏季休暇中の開室を試み、13 人(9 グループ)の利用があった。

以下に 2011 年度月別の学習支援利用学生数の表を示す。

	4 月	5 月	6 月	7 月	夏季休 暇	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	年間計
人数	15	41	39	33	13	9	21	20	29	26	30	276
グループ	15	35	36	33	9	9	21	20	29	26	30	263
報告書	15 件	35 件	36 件	33 件	9 件	9 件	21 件	20 件	29 件	26 件	30 件	263 件

*統計は 2 月 29 日締め

*支援 1 回につき、1 件の報告書を提出

前期では、5 月の利用学生数が 41 人(報告書 35 件)と最も多く、次いで 6 月の利用学生数が 39 人(報告書 36 件)であった。新年度開始から一月が経過し落ち着いた頃、昨年

度から継続して利用する学生が訪れ出し、また、授業が本格的に始まり新入生の訪問が増加し始めたのもこの時期である。後期では、2月の利用学生数が30人（報告書30件）と最も多く、次いで12月の利用学生数が29人（報告書29件）であった。2月の後期試験、12月の卒業論文提出締め切り等の影響だと思われる。

ただ、今年度は夏季休暇中を除き、月別の利用学生数に大幅な増減は見られなかった。それは、今年度の主な支援内容が、①授業に関する質問・予習・復習の109件と最も多く、一年を通して、授業に関する学習支援を求める一定の学生が、繰り返し習慣的に訪れていたからであろう。さらに、支援内容に関しては、②レポート、論文に関する質問相談が104件、③資格取得対策（英検・TOEIC・管理栄養士国家試験・図書館司書）が53件の順で続いた。上記に挙げた支援内容以外にも、④その他の項目が35件あり、時間割、シラバスに関する質問や相談、ゼミ選択や就職活動について、また大学生活における学習面の不安や人間関係の悩み等を相談する学生の姿も目立った。時間割や就職活動等学習以外の相談には、学生の話しを聞き適切な学内の各部署へ案内を行った。

（2）2011年度の問題点と今後の目標

学習支援室の設置から2年目の今年度は、昨年度から継続して訪れる学生も多く、定着の兆しが見え大変喜ばしい状況であった。そして、当初は数名のグループ利用だった学生も、各自の力や学習のスピードに差が生じてくるに従い個人で訪問するケースが増え、一人で学習支援を利用する学生が初年度と比較し増加した。利用学生の学習内容も多岐にわたり、学生一人に対し支援時間は平均1.5時間、長い場合は3時間に及ぶ時もあった。特定の曜日や、試験前、卒業論文締め切り前には予約申し込み段階で開室時間が全て埋まる日もあり、予約なしで直接訪れた学生にラーニング・アドバイザーが対応できない時間帯が生じたのは残念であった。学生の利用が特定の曜日や時期に集中する傾向があることから、支援予約の多い日、また試験前や卒業論文締め切り月など利用学生の増加が予想される期間を特定し、常駐ラーニング・アドバイザーの人数を調整するなど検討し、学習支援を必要とする一人でも多くの学生に応じられるよう改善できれば幸いである。

また、インターネットでの案内、図書館ニュース、ポスターの掲示、リーフレットの作成などを通して学習支援室の告知活動を継続し、学生へのさらなる認知度上昇を目指したい。設置から2年目の今年度も、「今まで学習支援室があることを知らなかった。」「友達に教えてもらい初めて知った。」という学生の声も少なくなかった。これまで以上に利用しやすい場であることを目標に、「学びの力」育成の一助として学習支援室が機能し、支援を現在必要とし、また今後必要とする学生のためにも、学習支援室の更なる発展を願っている。

2. 研究概要

博士論文『平家物語の人物像』(2008年博士(文学)取得)において、『平家物語』が収載する女性説話を取り上げ、諸本間に見られる相違に注目しながら女性の人物像、物語の特質について論じてきた。

『平家物語』には特徴的な女性説話、また注目すべき女性の姿が描かれながらも、武士の争乱を主軸に構成された物語の中では、付属的なものとして捉えられる傾向にある。しかしながら、『平家物語』に登場する女性達の姿は諸本によって印象を異にし、また史実との乖離も認められることから、物語の中でも注目すべき存在として先学諸氏により多くの考察が行われてきた。

『平家物語』の女性説話は女性達のほとんどが尼の世界に身を投じる姿が描かれることから往生譚として、また、物語の享受者に対し具体的な出家譚を説く材料として流布したと考えられ、『平家物語』の女性説話は、それを基軸に、出家譚・往生譚としての見地に立ち論じられるものが多くある。しかし、『平家物語』に登場する女性達が出家の道を辿る構成は、覚一本に至って「小宰相」(巻第九)以外の全女性の共通事項として認められるのであり、たとえば『平家物語』の古態本である延慶本は、必ずしも女性説話の結末を出家とは結び付けていないのである。『平家物語』の女性説話を出家と言う観点のみで比較・分類するのではなく、一説話の本筋、人物の言動や心中描写はもちろん、『平家物語』全体に与える影響の有無など物語の特質を明らかにし、人物と物語の性質を出家という共通項以外から『平家物語』の成立過程において女性説話が如何なる変容を遂げてきたのか考察を行った。

Ⅶ. 2011 年度広島女学院大学学術研究助成 【交付一覧】

研究代表者 (所属学部)	研究種目	研究課題名または書目	交付年度(研究期間)	備考
中村 浩一郎 (文学部)	個人研究	スクランプリング・フォーカス・トピックに関する通言語 的統語的研究	2011(2010～2011)	継続
山内 理恵 (文学部)	個人研究	D.H.ロレンスから見たブロンテ姉妹-エミリを中心に-	2011(2010～2011)	継続
田中 沙織 (生活科学部)	個人研究	幼児と保護者における身体活動量の関連性-幼児の 身体活動向上のための支援に向けて	2011(2010～2011)	継続
篠原 収 (生活科学部)	個人研究	日系グローバル企業におけるダイバシティ・マネジメ ント	2011(2010～2011)	継続
中田 美喜子 (生活科学部)	個人研究	広島県備北地区における高大連携遠隔講義 -遠隔講義受講者の意識調査および生涯学習への対応について-	2011(2010～2011)	継続
宮本 陽子 (文学部)	個人研究	アンチモダンとしてのサド	2011(2011～2012)	新規
三樹 正典 (文学部)	個人研究	幼児期に行う「ヌード(裸体像)デッサン」が引き出す効 果について	2011(2011～2012)	新規
橋本 一夫 (生活科学部)	個人研究	Bochner可積分関数の多次元上の開領域での本質 的有界変動の特徴付けに関する研究	2011(2011～2012)	新規
末永 航 (生活科学部)	個人研究	広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における 計画・制作・受容課程の比較研究	2011(2011～2012)	新規
石井 三恵 (生活科学部)	個人研究	教師のコミュニケーション能力開発	2011(2011～2012)	新規
小野 育雄 (生活科学部)	個人研究	建築家の思索にみる現象としての空間へのアプロー チと生活世界のつきつめ方	2011(2011～2012)	新規
Ronald D. Klein (文学部)	共同研究	明治時代の日本について書いた在住西洋女性たち	2011	新規
松浦 正博 (文学部)	共同研究	大学組織運営におけるFD・SDの実践的課題に関す る学術的研究	2011(2011～2012)	新規
妻木 陽子 (生活科学部)	共同研究	食事中の必須アミノ酸のバランスを軸とするアレルギー 予防の新規栄養管理の構築	2011(2011～2012)	新規
大場 美和子 (文学部)	学術図書出版	接触場面における三者会話の研究	2011	
米倉 緯 (文学部)	学術図書出版	ことばが語るもの—文学と言語学の試み—	2011	

Ⅷ. 2011 年度科学研究費補助金

【交付一覧】

研究代表者 (所属学部)	研究種目 審査区分	課題番号	研究課題名	交付年度(研究期間)		備考
				交付額 (直接経費)	交付額 (間接経費)	
木本 浩一 (文学部)	基盤研究(B)	22401037	南アジアにおける「地域」ガバナンスとしての 共同森林経営に関する地理学的研究	平成23(平成22～24)		継続
	海外			3,600,000 円	1,080,000 円	
小林 文香 (生活科学部)	基盤研究(C)	21520304	ストック型社会形成に向けた購買意識からの 脱却をめざす住情報提供に関する研究	平成23(平成21～23)		継続
	一般			600,000 円	180,000 円	
森 あおい (文学部)	基盤研究(C)	21500725	アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサ ブカルチャー	平成23(平成21～23)		継続
	一般			900,000 円	270,000 円	
山本 武史 (文学部)	基盤研究(C)	22520514	母音字・尾母音が音節量に与える効果につ いて	平成23(平成22～24)		継続
	一般			800,000 円	240,000 円	
山下 京子 (文学部)	基盤研究(C)	22520514	青年期女子の注意欠陥多動性障害(ADHD) への臨床心理学的アプローチ	平成23(平成22～26)		継続
	一般			700,000 円	210,000 円	
大場 美和子 (文学部)	若手研究(B)	23720301	被爆者の英語による証言の理解と伝達の追 跡調査—情報と解釈の変化の分析—	平成23(平成23～25)		新規
				1,200,000 円	360,000 円	

※ 本紙上では研究代表者への交付について報告し、研究分担者として学内外から受けた配分額については記載しない。

X. 関係規程

広島女学院大学総合研究所規程 2031～2032

広島女学院大学公開講座運営規程 2033

広島女学院大学学術研究助成規程 2501～2505

広島女学院大学学術研究助成規程細則 2507

広島女学院大学学術研究特別助成規程細則 2509～2510

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程 2521

広島女学院大学学会特別助成規程細則 2531

広島女学院大学特別専任研究員規程 2541

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規定 2551～2553

広島女学院大学受託研究規程 2561～2562

広島女学院大学総合研究所規程

1992.	10.	7	制 定
1993.	12.	17	改 正
1999.	1.	7	〃
1999.	3.	2	〃
2001.	5.	7	〃
2007.	4.	1	〃

(名 称)

第1条 広島女学院大学学則第49条に基づいて、本学に研究所を置き、広島女学院大学総合研究所（以下「研究所」という。）と称する。

(目 的)

第2条 研究所は、広く人文・社会・自然の諸領域にわたる専門の学術理論及び応用に関する総合的な研究を行い、学術・文化の創造と発展に貢献すると共に地域社会の進展に寄与することを目的とする。

(事 業)

第3条 研究所は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 理論的研究・実態調査研究及び実験研究
- (2) 調査・研究のために必要な資料の収集・整理
- (3) 研究発表及び研究報告書の編集・刊行
- (4) 研究会・講演会及び公開講座等の開催
- (5) 国内外の大学及び研究機関との交流
- (6) 調査・研究の受託
- (7) 広島女学院大学学術研究助成費の交付
- (8) その他研究所委員会で必要と認めた事業

(研究部門)

第4条 研究所は、研究活動の推進をはかるため、人文・社会・自然科学の諸部門を設ける。

(組 織)

第5条 研究所に所長、研究所員、研究員及び事務職員を置く。

2 研究所に専任研究員を置くことができる。

(所 長)

第6条 所長は学長に直属し、学長が学部教授会の議を経て専任教員の中から任命する。

2 所長は研究所の業務を統括し、研究所を代表する。

3 所長の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

(研究所員)

第7条 本学の専任教員は、すべて研究所員となる。

(研究員)

第8条 研究員は、専任研究員、兼任研究員、客員研究員とする。

2 専任研究員は、別に定める規程により研究所委員会の選考に基づき、大学評議会の議を経て、学長が任命する。

ただし、所長が必要と認めた場合、その推薦による特別専任研究員を置くことができる。特別専任研究員については別に定める。

3 専任研究員の身分は、前項ただし書きによるものをのぞき、教授、准教授、専任講師、助教とする。

4 兼任研究員は、各学部専任教員のうち、研究所委員会の推薦と所属長の承認を経て学長が委嘱する。

5 客員研究員は、研究所委員会の推薦に基づき、学長が委嘱する。

(事務職員)

第9条 事務職員は、第3条各号に関する事務を処理する。ただし、第7号の事務については別に定める規程、取扱内規によるものとする。

(研究所委員会)

第10条 研究所に研究所委員会を置く。

2 研究所委員会は、研究の計画、実施及び予算、決算、研究所の運営に関する重要事項について審議する。

3 研究所委員会は所長、専任研究員、各学部教授会から推薦された教員5名によって構成される。

4 研究所委員会は所長が招集し、その議長となる。

5 研究所委員会の委員の任期は、所長を除き1年とする。ただし、再任を妨げない。

附 則

1 本規程は2007年4月1日から施行する。

2 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学公開講座運営規程

1972.	12.	4	制 定
1983.	9.	7	改 正
1989.	12.	20	〃
1992.	7.	31	〃
1999.	1.	7	〃
1999.	3.	2	〃
2000.	4.	1	〃

第1条 この講座は、市民の知的探求心にこたえるために広く大学の学術研究の成果を公開し、地域社会に奉仕することを目的とする。

第2条 この講座は、一般市民を対象に広く公開する。

第3条 この講座は、毎年秋の一定期間にシリーズとして適当な時間を開講する。

第4条 この講座は、総合研究所長及び各学科主任からなる公開講座運営委員会が企画立案にあたる。

第5条 この講座を受講しようとする者は、所定の申込書によって研究所事務課に申し込む。

第6条 委員会の事務は研究所事務課が担当する。

第7条 委員会は必要に応じてその他の教職員の出席を求めることができる。

第8条 本規程の改正は委員会の議を経て学部教授会がこれを行い、大学評議会に報告する。

附 則

本規程は2000年4月1日から施行する。

広島女学院大学学術研究助成規程

1994.	1.	31	制 定
1994.	11.	7	改 正
1995.	10.	2	〃
1997.	3.	11	〃
1999.	3.	2	〃
2000.	3.	7	〃
2001.	3.	27	〃
2002.	1.	8	〃
2002.	10.	8	〃
2004.	10.	5	〃
2007.	2.	6	〃
2008.	3.	4	〃
2008.	7.	1	〃
2010.	12.	7	〃

第1章 総 則

(制度の趣旨)

第1条 広島女学院大学における学術研究を奨励し、研究の促進に寄与するため「広島女学院大学学術研究助成」(以下「研究助成」という。)を設ける。研究助成の取扱については、本規程の定めるところによる。

(研究助成の種類)

第2条 研究助成には、(1) 個人研究 (2) 共同研究 (3) 学術図書出版助成の3種目を置き、その他必要に応じて学術研究特別助成と学会特別助成を行い、特別助成については細則を別に定める。

(助成目的と助成対象)

第3条 各種目の助成目的と対象は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究は、個人の研究の奨励を目的とし、教員が個人で進める研究計画を助成する。
- (2) 共同研究は、共同で行う研究の奨励を目的とし、教員が共同で進める研究計画を助成する。
- (3) 学術図書出版助成は、研究成果刊行の奨励を目的とし、個人又は学内者の共著の刊行を助成する。なお、本学専任教員の申請に限り、本学院(高等学校・中学校・幼稚園)専任教員との共著も含むものとする。

(助成額と助成期間)

第4条 各種目の1件ごとの助成額及び助成期間は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究においては1年から2年で、単年度50万円以下。総額100万円以下。

- (2) 共同研究においては1年から2年で、単年度100万円以下。総額200万円以下。
- (3) 学術図書出版助成においては、助成年度の2月末日までに刊行するもので100万円以下。

第2章 申 請

(研究助成の申請)

第5条 各年度の研究助成の申請は、助成の前年度3月末日までとする。ただし、学術図書出版助成において助成年度に募集することがある。

第6条 研究助成の申請があった時は、第7条に定める申請資格及び第8条に定める申請要件を満たしている場合、これを受理する。

(申請資格)

第7条 各種目の申請資格は以下のとおりとする。

- (1) 個人研究は本学専任教員(外国人契約教員を含む)個人
- (2) 共同研究は本学専任教員(外国人契約教員を含む)のグループ
- (3) 学術図書出版助成は本学専任教員(外国人契約教員を含む)

2 研究代表者は、同一種目について複数の申請をすることはできないものとする。

3 継続研究の継続期間中、研究代表者は学術図書出版助成と特別助成以外の申請はできない。

(申請の要件)

第8条 学術図書出版助成については、助成年度の2月末日までに刊行を完了する見込みが確実でないものは申請できないものとする。

第3章 審 査 と 決 定

(審査委員会の設置)

第9条 各年度の研究助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第10条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査対象からの除外)

第11条 申請があったもののうち、研究代表者として他の公的助成金等の受給が確定したものについては、これを審査対象から除外する。

(適格要件及び審査基準)

第12条 審査委員会は、提出された申請書類に基づいて審査する。

2 審査は以下の適格要件について判断する。

(1) 申請に関する要件及び重複に関する事項

(2) 過年度における報告義務の履行状況

3 審査は以下の項目について行う。

(1) 研究目的、学問上の必要性の明確さ

(2) 研究計画の具体性及び申請経費との整合性

(3) 研究計画全般の総合的判断

(4) 近年の業績状況（萌芽研究を除く。）

(決 定)

第13条 基準に達したものが多数の場合は、審査委員会において、種目により前条3項目及び本学助成の受給状況などを総合的に判断して順位を決定する。

2 研究助成の各種目の採択件数及び採否は審査委員会の議を経て大学評議会で決定する。

(採択の通知)

第14条 研究助成の決定が行われた場合、速やかに採否を申請者に通知するものとする。

第4章 助 成 金 の 執 行

(研究計画の変更及び辞退)

第15条 研究助成の採択後に研究計画の変更が生じた場合、軽微な変更を除いて速やかに研究計画変更承認申請書を研究所に提出しなければならない。

2 採択後に本助成を辞退する場合は、速やかに届けるものとする。

(助成の停止)

第16条 研究計画に変更があるにもかかわらず、研究計画変更承認申請書の提出がなかった場合は、研究助成の執行を停止し、返還を求めることもある。

(研究費の執行)

第17条 研究助成の執行は研究計画に基づき、交付決定通知以降の支出とし、当該年度2月末までに完了しなければならない。個人研究、共同研究においては、併せて決算報告書を提出するものとする。ただし個人研究、共同研究における継続研究の場合は事前に許可を得て4月1日以降支出することができる。

2 2月末以降の執行は、これを認めないものとする。

(助成金の支出範囲)

第18条 各種目の支出範囲は別表のとおりとする。

第5章 受給者の義務

(研究計画に基づく執行)

第19条 受給者は、審査時に提出した研究計画に基づき、誠実に研究を遂行しなければならない。

(研究成果の発表・提出)

第20条 個人研究、共同研究については、各年度末までに所定の概要報告書を提出しなければならない。また、助成最終年度の次年度末までに、論集又は学術雑誌等に発表し、その研究成果を報告しなければならない。学術雑誌以外での成果の発表については別に定める。

2 学術図書出版については、助成年度内に刊行成果5冊を提出しなければならない。出版する図書のまえがき若しくはあとがきに「広島女学院大学学術研究助成制度」による出版物である旨を明記するものとする。

(業務違反)

第21条 本章に定める義務が遵守されなかった場合、助成を受けた者は当該年度を除き3年間、本学術研究助成に申請する資格を有しないものとする。

第6章 その他

(研究助成の事務)

第22条 本規程に定める研究助成の事務は、総合研究所事務課が担当する。

附 則

- 1 本規程は、2009年4月1日から施行する。
- 2 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。
- 3 本規程についての細則は別に定める。

付記（移行措置）

2009年4月1日施行の規程の改正に伴い、継続期間中の若手研究、萌芽研究、基盤研究においては、継続期間終了まで2008年3月4日改正の規程によるものとする。但し、第4章第18条については、改正後の規程を適用する。

附 則

- 1 本規程は、第7条第2項及び第11条を改正、第7条第4項を削除し、2011年3月1日から施行する。

別表 各種目の支出

種 目	支出範囲	支出できないもの
個人研究 共同研究	設備備品費（消耗図書を含む） 消耗品費（複写費を含む） 旅費*（グリーン料金を除く） 謝金 その他（通信費・印刷製本費 その他必要と認めるもの） 研究計画に必要な学会出席旅費・ 参加費	研究メンバーに対する謝金 その他研究に関連のない経費
学術図書出版 助 成	直接出版経費（組版代・製版代・ 印刷代・用紙代・製本代）	編集・校正・特製本等の諸費

*継続して 30 日程度の国外旅費の場合は、当該年度の休暇期間中に行うものとする。
ただし、短期間の場合はこの限りではない。

広島女学院大学学術研究助成規程細則

1995.	12.	11	制 定
1996.	12.	3	改 正
1999.	3.	2	〃
2002.	1.	8	〃
2008.	7.	1	〃

(申 請)

第1条 助成を受ける研究年度の前年度末までに、単価又はセット価格が5万円以上のものは見積書を、旅費については明細を提出する。

2 当初の申請に変更のない場合に限り、継続研究の継続申請は不要とする。

(審査と決定)

第2条 継続研究の助成額については、各年度毎に審査する。

(助成金の執行)

第3条 継続研究の予算の執行は年度毎とする。

2 図書館資料については、「広島女学院図書館資料管理規程」によるが、固定資産として計上する資料の基準は、5万円以上とする。

(受給者の義務)

第4条 成果の発表については、芸術系の研究の場合芸術活動の記録及び作品を成果とみなすことが出来る。

(軽微な変更の範囲)

第5条 研究方法の変更、分担者の変更、役割分担の変更、単価及びセット価格が5万円未満の使用内訳の変更は軽微な変更とし、研究代表者の判断に委ねる。単価及びセット価格が5万円以上の設備備品費(資産図書を含む)支出の場合は事前に許可を得て支出するものとする。

附 則

1 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

2 本細則は、2009年4月1日から施行する。

広島女学院大学学術研究特別助成規程細則

2001. 3. 27 制 定
2002. 1. 8 改 正
2002. 10. 8 "

(目 的)

第1条 本学における学術研究を奨励するために、顕著な成果をおさめた研究を対象とする。

(申 請)

第2条 学術研究特別助成の申請締切日は、次のとおりとする。第一次申請の締切は当該年度の6月15日まで、第二次申請の締切は当該年度の12月15日まで。
なお、申請の対象となる成果は申請締切日1年以内のものとする。

2 助成対象の成果が本学学術研究助成及び他機関助成を受けていないものであれば、重複申請をしてもよいものとする。

(助成額と助成期間)

第3条 当該年度の4月から申請日までの期間において1件10万円程度とする。

(申請資格)

第4条 学術研究特別助成の対象は本学専任教員で個人又はグループとし、当該年度の申請は2件を限度とする。

(審査委員会の設置)

第5条 学術研究特別助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第6条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査と決定)

第7条 学術研究特別助成については、提出された申請書類と学外の全国的学術雑誌等に発表された論文及び全国レベルの雑誌で高い評価を受けた論文をもとに審査する。また、全国的な規模での賞金が出ない受賞の場合は、申請書類を受賞報告書をもとに審査する。

2 学術研究特別助成の採否は審査委員会の議を経て大学評議会で決定する。

(採否の通知)

第8条 学術研究特別助成の決定が行われた場合、速やかに採否を申請者に通知するものとする。

(助成金の執行)

第9条 学術研究特別助成金の執行は、当該年度2月末日までに学術研究特別助成金として給与に含めて支払うものとする。

附 則

- 1 本細則は、2003年4月1日から施行する。
- 2 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学「論集」執筆・編集規程

1975.	2.	施 行
1989.	12. 20	改 正
1992.	7. 31	〃
1993.	11. 17	〃
1997.	1. 7	〃
1998.	12. 16	〃
1999.	3. 2	〃
2005.	11. 9	〃
2007.	4. 1	〃
2011.	4. 12	〃

第1条 本論集には、専門学術に関する未刊行の論文を掲載する。

第2条 寄稿者は、本学の教授、准教授、専任講師、助教、助手とする。ただし、共同執筆者については、寄稿者が共同執筆者として推薦し、論集委員会が認めた者とする。

第3条 論集の編集及び発行の責任は、論集委員会がこれを負う。

第4条 論集の発行代表者は学長、編集代表者は総合研究所長とする。論集委員は総合研究所委員がその任にあたる。

第5条 論文の内容及び掲載の可否に関する判断は、寄稿者に委ね、論集委員会は原則として、これを行わない。ただし、編集の都合上、掲載時期、形式等について変更を求めることがある。

2 入稿後の大幅な変更及び取り下げについては、理由を明らかにして論集委員会に諮る。寄稿者に対して、当該年度を除き2年間の寄稿を停止するものとする。

第6条 論集の発行時期、論文の長さ及び体裁、論文の提出期限、校正等に関する編集方式については論集委員会に一任する。

第7条 委員会は必要に応じてその他の教職員の出席を求めることができる。

第8条 本論集に掲載された論文の著作権は著者に帰属するものとする。ただし、広島女学院大学は本誌に掲載された論文を電子化、または複製の形態などで公開する権利を有するものとする。

附 則

1 本規程の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

2 本規程は2007年4月1日から施行する。

附 則

1 本規程は第4条及び第5条を改正し2011年4月1日から施行する。

広島女学院大学学会特別助成規程細則

2001. 3. 27 制 定

2008. 7. 1 改 正

(目 的)

第1条 全国規模の学会で、本学院を会場として開催し、運営費の一部を助成することにより、本学の学術的広報活動に寄与できるものを対象とする。

(申 請)

第2条 学会特別助成の申請は助成の前年度3月末日までとする。

(助成額と助成期間)

第3条 当該年度開催される学会に対して1件20万円程度とする。

(申請資格)

第4条 学会特別助成は本学専任教員が申請するものとする。

(審査委員会の設置)

第5条 学会特別助成の審査及び配分額を諮問するために総合研究所委員会のもとに審査委員会を置く。

(審査委員会の構成)

第6条 審査委員会は次の委員をもって構成する。

- (1) 総合研究所長
- (2) 各学科主任
- (3) その他審査委員会が委嘱する専門委員

2 審査委員会には委員長を置き、総合研究所長がこれにあたる。

(審査と決定)

第7条 学会特別助成については、提出された申請書類に基づいて審査する。

(助成金の執行)

第8条 学会特別助成の執行は、当該年度2月末日までに完了しなければならない。

(受給者の義務)

第9条 助成年度末までに、学会終了報告書(会計報告を含む。)を提出しなければならない。

附 則

- 1 本細則は、2009年4月1日から施行する。
- 2 本細則の改正は、委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会に報告する。

広島女学院大学特別専任研究員規程

2001. 6. 19 制 定

2004. 3. 2 改 正

(目 的)

第1条 本学大学院博士後期課程の修了者で、優秀な能力を持った人物の研究を継続・促進するため、総合研究所に特別専任研究員(以下「研究員」という。)を置く。

(資 格)

第2条 本学大学院博士後期課程の修了者で、引き続き研究活動を継続して行うことができ、研究科委員会より推薦された者とする。

(定 員)

第3条 原則として定員は1名とする。

(任 期)

第4条 研究員の任期は1期1年通算2年とする。ただし、総合研究所委員会が認めた場合はさらに1年に限り延長することができる。

(申 請)

第5条 研究員となる前年度の3月末までに研究計画書を指導教授のもとで作成し、総合研究所に提出する。

(審査と決定)

第6条 総合研究所委員会の審査を経て大学評議会で決定し、学長が任命する。給与については別に定める。

(研究活動)

第7条 研究員は指導教授のもとで研究活動を行う。ただし、研究活動が不可能になった場合は、その旨を速やかに総合研究所長に申し出なければならない。

(義 務)

第8条 研究員は研究の概要報告を、研究初年度末までに総合研究所に提出しなければならない。また、研究活動終了の年度末までに研究成果を学術雑誌等に発表し、総合研究所に報告しなければならない。

2 研究員は総合研究所長の命による義務を担うものとする。業務内容については別に定める。

3 本条に定める義務が遵守されなかった場合、研究員の資格を失うものとする。

附 則

1 本規程は、2004年4月1日から施行する。

2 本規程の改正は、総合研究所委員会の議を経て大学評議会がこれを行い、学部教授会及び研究科委員会に報告する。

広島女学院大学における科学研究費補助金に関する規程

2008.1.8 制 定

(目的)

第1条 この規程は、広島女学院大学（以下「本学」という。）における文部科学省（以下「文科省」という。）及び日本学術振興会が交付する科学研究費補助金（以下「科研費」という。）の運営・管理を事務組織規程第25条に基づき、総合研究所事務課（以下「総合研」という。）で行うこと及びその内容について定める。

(根拠)

第2条 科研費の運営・管理については、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（法律第179号）」「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（政令第255号）」「科学研究費補助金取扱規程（文部省告示第110号）」「独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究等）取扱要領（規程第17号）」「文科省研究者使用ルール（補助条件）」「学振研究者使用ルール（補助条件）」及び本学の諸規則等の他、別に定めのない限りこの規程による。

(責任体系)

第3条 科研費に関する運営・管理を適正に行うための責任体系を「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）（平成19年2月15日文部科学大臣決定）」に基づき、次のとおりとする。

- (1) 科研費について最終責任を負う最高管理責任者は、経理規程第1章第8条第4項に基づき理事長とする。
- (2) 科研費について、最高管理責任者を補佐し実質的な責任と権限を持つ統括管理責任者は、経理規程第1章第8条第2項に基づき学長とする。
- (3) 科研費について、実質的な責任者としての部局責任者は、事務組織規程第3章第10条第4項に基づき事務局長、および事務組織規程第3章第10条第10項に基づき総合研究所長とする。

(総合研で行う業務)

第4条 総合研は、科研費について次の業務を行う。

- (1) 科研費研究者名簿（以下「研究者名簿」という。）への登録等に関すること
- (2) 応募・交付申請に関すること
- (3) 交付される科研費（直接経費・間接経費・分担金）の受領、執行・管理に関する

こと

- (4) 科研費による出張に関すること
- (5) 実績報告に関すること
- (6) 研究成果報告等に関すること
- (7) 内部監査に関すること
- (8) 他の研究機関の科研費に関すること
- (9) 学内外からの問合せへの対応
- (10) その他、文科省及び日本学術振興会の定めること

(研究者名簿への登録等)

第5条 文科省の定める科研費への応募資格要件をすべて満たし、研究者名簿に登録することができる者は、次の各号の一に該当する場合とする。

- (1) 本学の専任教員(外国人契約教員を含む)
- (2) 特別専任研究員

2 研究者名簿への登録・記載事項の変更等は、名簿への登録等を希望する者が所定の期間内に総合研に申し出るものとする。

3 研究者名簿に登録した者が第1項に該当しなくなった場合は、文科省の定める転出・退職等の所定の手続きを行う。

(科研費による研究活動)

第6条 研究代表者は、科研費の交付申請を行う場合、不正行為等を行わない旨の誓約書(様式A-2-3)を提出しなければならない。

2 研究代表者及び研究分担者は、交付された科研費による研究活動について、文科省並びに日本学術振興会の補助条件及び本学の諸規則等を遵守しなければならない。

3 交付された科研費による研究代表者及び研究分担者等の研究活動は、本学の業務として行うものとする。

(科研費の執行・管理)

第7条 交付される科研費は、経理規程第2章第11条第2項に該当するものとする。

2 学長宛に送金された科研費は、研究代表者毎の預金口座に振り替えて管理する。なお、研究代表者毎の預金口座に振替えるまでの間に利息が生じる場合、及び、振替えた後に利息が生じる場合は、研究代表者に帰属し、その補助事業遂行の為に使用するものとする。

3 間接経費が交付された場合は、研究代表者毎の預金口座に振替えた後すみやかに所

定の方法により譲渡の手続きを行い、本学は譲渡を受け入れる。譲渡された間接経費は、本学関係部局と調整のうえ執行等を行う。当該研究代表者が他の研究機関に所属することとなる場合には、直接経費の残額の 30%に相当する額の間接経費を当該研究者に返還する。

- 4 科研費(直接経費・分担金)の執行の決裁者は、第3条第3号に基づき総合研究所長とする。
- 5 科研費(直接経費・分担金)により購入した設備、備品等については、研究代表者からの寄付を受け入れるとともに、当該研究者が他の研究機関に所属することとなる場合は、その求めに応じ当該研究者に返還する。
- 6 科研費(直接経費・分担金)の執行・管理の詳細については別に定める。ただし、他の研究機関に所属する研究分担者に分担金を配分した場合の分担金の執行・管理については、当該研究分担者が所属する研究機関の定め等に従う。

(内部監査)

第8条 文科省及び日本学術振興会の定める内部監査は、大学事務局が行う。

(他の研究機関の科研費)

第9条 他の研究機関の科研費について次の業務を行う。

- (1) 他の研究機関の研究分担者になる手続き
- (2) 他の研究機関の科研費による出張に関する手続き

(科研費に関する疑義)

第10条 部局責任者は、科研費の運営・管理等について疑義等が生じた場合、すみやかに統括管理責任者へ報告しその指示に従う。

附則

- 1 この規程の改廃は、大学評議会の議を経て学長がこれを行う。
- 2 本規程は、2008年4月1日から施行する。

広島女学院大学受託研究規程

2009. 10. 13 制定

(目的)

第1条 この規程は、広島女学院大学（以下「本学」という。）における受託研究の取扱いについて定め、適正な事務処理を図ることを目的とする。

(定義)

第2条 この規程において「受託研究」とは、本学の専任教員が民間企業、官公庁等外部機関（以下「委託者」という。）からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する経費を委託者が負担し、研究成果を委託者に報告するものをいう。

(受入基準)

第3条 受託研究の受入は、本学の教育研究上有意義であり、かつ、本来の教育研究に支障を生じるおそれがないと学長が認める場合に限り行うものとする。

(申込み)

第4条 本学に受託研究を委託しようとする者は、本学の専任教員と事前に協議の上、所定の受託研究申込書を、総合研究所を経て学長へ提出するものとする。

(受入の決定)

第5条 受託研究の申し込みがあった場合において、その内容が適切であると学長が認めたものについて、受け入れを決定するものとする。

2 前項において、申し込みの内容は、総合研究所委員会に設置される委員会（受託研究審査委員会）での審議と承認を経て学長の判断を仰ぐものとする。

(契約の締結)

第6条 受託研究の受け入れを決定したときは、ただちに学長と委託者との間に受託研究契約を締結しなければならない。

(研究費の負担)

第7条 委託者は、当該研究の遂行に必要な経費を負担するものとする。

2 委託者が負担する経費の内、30％に相当する額を、本学の雑収入として研究に必要な間接経費の一部に使用する。

3 前項にかかわらず、次に該当する場合の間接経費の取扱いは、受託研究契約の定めるところによる。

(1) 委託者が国の機関、独立行政法人、地方公共団体である場合

- (2) 当該研究に対する社会的要請が強く、本学の教育研究上極めて
有意義であるもの

(取得物品の帰属)

第8条 受託研究に要する経費により取得した設備備品の所有権は、原則
として本学に帰属し、委託者に返還しない。

- 2 物品の調達、人件費の支払、旅費等の計算は、受託研究契約に定めが
ある場合を除き本学の規程に準拠して行うものとする。

(所管部署)

第9条 受託研究の取扱いに関する所管部署は、総合研究所事務課とする。

附則

- 1 本規程は、2010年4月1日以降に締結される受託研究から適用する。
- 2 本規程の改正は、総合研究所委員会の議を経て大学評議会がこれを行
い、教授会に報告する。

編集委員

坂井堅太郎	総合研究所所長（代表）
木本 浩一	総合研究所委員
田頭 紀和	総合研究所委員
金田 仁秀	総合研究所委員
三木 幹子	総合研究所委員
村上 和保	総合研究所委員
石橋 由美	総合研究所委員

広島女学院大学総合研究所年報 Vol. 16

2012 年 7 月 31 日発行 ©

〔非 売 品〕

編集代表 坂井堅太郎

発行代表 長尾ひろみ

発 行 所 広島女学院大学総合研究所

〒732-0063 広島市東区牛田東四丁目 13-1

TEL (代)082-228-0386